鈴木

石ぐら会の那須野が原入門講座　　3月10日（土）9：30～

大山家と三島家のかかわり

～『不如帰』の真相は～

植木　不二夫

はじめに

弥太郎と捨松の書簡

大山叔母上様へ　　弥太郎

三島子爵閣下（英文）　捨松

1．大山家の人びと

(1) 大山　巌

① 日本陸軍創設の父

陸軍卿・陸軍大臣、陸軍大将・元帥、参謀本部総長、内大臣

貴族院議員、元勲、公爵

② 加治屋開墾場開設、大山・西郷農場に分割

③ 大正5(1916)年　74才で逝去、東京で国葬、翌日西那須野に埋葬

大山墓所翌年完成　地震の大被害　12月10日一般公開

(2) 先妻　沢子夫人　万延元(1860)年4月14日生　早死

吉井友実（日本鉄道会社社長）の娘　16才で結婚　沢子

4人の娘・・・信子・美津子・芙美子・留子を残して　産後熱で死亡

明治改元　答　西郷命名

(3) 捨松夫人　安政7(1860)年2月24日生

会津藩家老山川尚江重固の末娘（幼名咲子）

慶応4(1868)年会津戦争　籠城して弾薬運び　敗れて斗南へ　函館の知人宅へ

明治4(1871)年 欧米派遣の岩倉使節団　百余名

女子留学生5名・・・黒田清隆の発案

幼名咲子から捨松へ　捨てたつもりで待つ

11年間滞米　名門女子学　パッサーカレッジ、優秀な成績、活動

山川一家・・・明治期　優秀一家の代表　特に健次郎・捨松の兄妹

捨松・・・明治の女性史に残る大才媛

大山　巌と結婚

○先妻が残した3人の娘の母親役　政府高官の夫人

○鹿鳴館時代の幕開け　不平等条約の改正

○日本女子教育の向上に貢献　女子英学塾の設立　塾長　津田　梅子

2．三島家の人びと

(1) 三島通庸（みちつね）　天6(1835)年～明治21(1888)年

○県令として　酒田・鶴岡県令、統一の山形県令、福島県令、
栃木県令＝土木県令・鬼県令

○内務省土木局長、警視総監
栃木県においては　肇耕社（ちょうこう）（三島農場）お開設
新陸羽街道の改修と開削、塩原新道の開削
県庁の宇都宮移転（県都は中央に）

妻和歌子　三つれ29才　7カ子19歳できた子供
男っぽい性格　子12人生む

(2) 三島弥太郎　慶応3(1867)年～大正8(1919)年

三島弥太郎の名は、三島通庸の長男であることは判っていても、貴族院議員・日本銀行総裁としてよりも、徳富蘆花の小説『不如帰』の主人公川島武男のモデルとしての方が知られている。

○ 若くしてアメリカ留学

明治16年 駒場農学校に入学
17年 駒場農学校試験　首位の成績により官費生となる。
農政学の研究の志を抱き渡米
フィラデルフィア中学校入学　18年卒業
18年 アマースト農科大学入学　21年卒業
19年 生理学競争試験に一等賞、クラーク金牌を受ける　21年卒業
20年 第三学年の級長に選ばれる。
21年 ボストン大学より学位称号を受け、卒業試験の成績優秀によりグリーンネール金牌を受ける。
ハーバード大学夏期学校に入り、化学を修め、得業証を受ける。
9月帰国、父通庸逝去、家督を相続
22年 米国に再渡航
コーネル大学　大学院に入学、昆虫学を修業　害虫の研究
23年 学術優秀をもって学士会員に選ばれる。
マスター・オブ・サイエンスの学位を受ける。
病気のため退学
24年 学術研究のため　ヨーロッパ（イギリス・フランス）視察
25年 帰国（2月）
※ 死に物狂いで猛勉強　そのため健康を損ねる。
留学期間中、ドル相場が生活を左右する感覚を肌身で実感する。

3．結婚、そしてその後の信子は

弥太郎誕生日

明治 26　4/ 1　結婚、西郷従道夫妻媒酌

4/ 7　信子実家帰りの日、大山邸では夫人はじめ 7 名がインフルエンザに罹患

4/ 9　信子も発病

三島家の主治医高木兼寛、診察、痰の検査の結果　昂進性の肺結核と判った。

三島家、大磯の別荘へ　看護婦・女中つきで転地療養

6/10　大山家、国元から叔母さまが見えたからと信子を東京へ連れ戻す。

三島家では一時的帰宅と考え、後日迎えに行くが、「信子は病気ゆえ療養させる必要がある。」と渡さない。

なぜ、話がこじれたのか。・・・両家の主治医の対立

大山家、邸内に隔離室を設け　伝染を防ぐ

10/20　信子、横須賀へ転地療養

11/22　弥太郎、大山叔母上宛書簡（年の記述ない。）

11/23　捨松、弥太郎宛書簡

明治 28　9/16　両家で協議の結果、正式離婚

明治 29　5/26　信子、死去

※ 主治医の対立

○三島家の主治医　高木　兼寛（海軍軍医）

「信子のような結核患者を結婚させるとは、医者として間違っている。」と抗議

○大山家の主治医　橋本　綱常（陸軍軍医）

立腹して「難癖をつけられたから、信子さんを是非三島家から取り戻していただきたい。」

・信子の発病はいつ？　　幼い時、肋膜炎を患った。

・捨松夫人、看護学に熟知している。　結婚については

・信子さんは、いらっしゃった時から病身、間もなく発病

（古くから三島家にいる老女）

・若奥様は汗をおかきになっている。始終お寝巻きを洗っては干していた。

（若奥様つき女中）

※ 横須賀へ転地療養

横須賀鎮守司令長官鮫島海軍大将夫妻、夫人は大山の姪、子供がない。

官舎でよく世話をして、元気になり食欲も出て、2 年もすれば全快するのでは。

ふとした事から離婚のことを知り、さんざん泣いて翌日から容態が悪くなってしまう。

手紙のやりとりをかくした（信る）　指輪を弥太郎宅に送る　留子の夫渡辺千春

※ 離婚・・・信子の病気は少しも良くならない。原因は、あくまでも信子の肺結核罹患であり、両家の協議によって明治 28 年 9 月 26 日、正式離婚した。

日本銀行に勤務　弥太郎千春を訪れて指輪返す

4．『不如帰（ほととぎす）』のこと

不如帰は、徳富蘆花が、明治 31 年 11 月～ 32 年 5 月　国民新聞に連載、33 年平民社から発刊された長編小説。

当時、尾崎紅葉の『金色夜叉（こんじきやしゃ）』と並ぶベストセラー、モデル小説の先駆（せんく）をなす。

三島家　　三島通庸の長男　弥太郎　　〔川島　武男〕

大山家　　大山　巌の娘　　信子　　〔片岡中将　　浪子〕

どこまでが「事実」で、どこからが「創作」なのか、限界がはっきりしない。

この小説のため悩まされたのは、姑の和歌子と継母の捨松。

大正 8 年、雑誌『婦人界』に蘆花は、不如帰の真相として「この小説は姑と義母を悪者にしなければ、人の涙を誘うことはできないので誇張して書いてあり、二人とも（和歌子と捨松）現在生存中でお気の毒に耐えない。」との文面が載っていた。

捨松は沼津の別荘でこれを読み、ほっとしたらしいが、この小説のためどれ程悩まされたか、この位のことで一度人の頭に入ったものは払拭されるものではない。

また、姑の和歌子は、後日この芝居が上演された時、家族の反対を押し切って見に行き、果たせるかな、カンカンに怒って帰ってきたということである。

5．弥太郎と捨松の書簡から

資料参照。　大山捨松の英文の書状とその和訳、大山捨松宛弥太郎書簡

大山捨松宛、弥太郎書簡には年の表示がなく、どの時点で書かれたものか、正確には判らない。これを見て捨松が「三島子爵閣下に呈す」になったのか。一見すると符合するように見えるが、内容で疑問が残る。

二人の正式離婚が明治 28 年 9 月 16 日、信子の死が翌年の 5 月 26 日である。恐らく 27 年秋に離婚話が出て、受け入れざるを得なくなり、弥太郎が切々心情を訴えようとしたものではなかろうか。

弥太郎の立場は三島家の当主で、母と 11 人の弟妹の大家族の面倒を見なければならない。数々のしがらみにより身動き出来ない状態で、封建時代の「家」の重みが厳然として残っていた。それに対し捨松は、11 年間のアメリカ留学生活を送り、日本の旧態依然とし、因習に充ちた社会に直面し抵抗を感じたのであろうか。

三島家身内の方のことばを次に

○　寿子（弥太郎長女）

たくさんの子どもの居る三島家で、肺病が伝染するのを恐れて、信子さんの離別を決めた。お祖母さま（和歌子）は、信子さんが可哀想で仕方なく思われた。ある時お祖母さまが、青山墓地の信子さんの墓に、お花とお団子を供えていた。

○　通陽（みちはる）（長男）夫人純（すみ）

弥太郎お父様が亡くなられて、かれこれ 60、主人が存命中、弥太郎お父様の書類を整理していた時、始終ポケットに入れて大切にしていた小さな皮の帳面に、名刺やお札と一緒に信子さんの若い頃の写真が入っていた。「ああ、お父様は一生この方を忘れないでいらっしゃったのだ。」と感心、今でも大切に保存している。

弥太郎の本心を伺い知ることができる。

6．弥太郎の業績と人柄

弥太郎は、明治 28(1895)年 11 月　四条隆詩の三女加根子と結婚し、新しい生活が始まった。

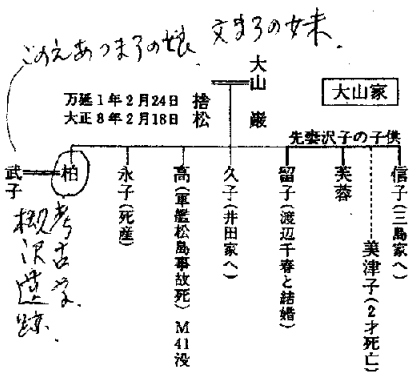
貴族院議員として、明治 30 年 7 月 10 日当選以来、37 年・44 年・大正 7 年に再選され、貴族院の子爵議員の中心的な存在で長期にわたり活躍した。

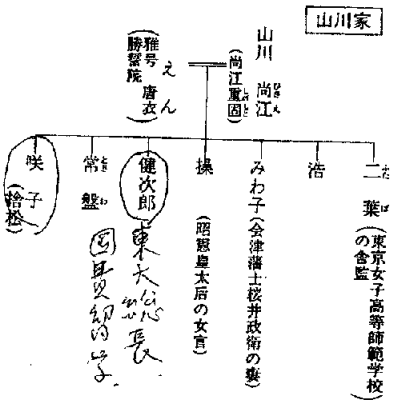
銀行関係では

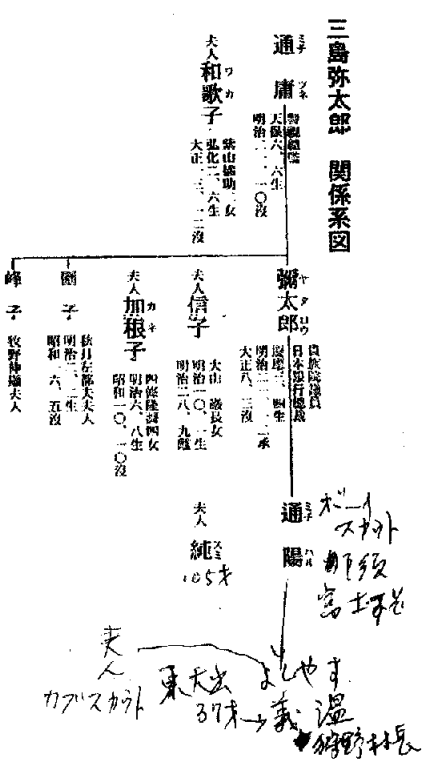
明治 39 年、横浜正金銀行調査課嘱託として入行し、銀行業務を基礎から学ぶ。
41 年、同行取締役、44 年には頭取に就任
大正 2 年日本銀行第 8 代総裁に就任し、金融の総元締として活躍した。
緻密な数字感覚を有し、留学時代のドル相場など肌身で体験し、国際金融に従事する基礎が培われていた。
アメリカ留学で農政学（害虫学）で学位をとった方が、日本銀行の総裁にと、畑違いも極端に変わった経歴の持ち主であった。
また、日本人ばなれした風貌は、公の場所においてよく外国人に間違いられたなど逸話も沢山残されている。
『子爵三島弥太郎伝』では、人物評・人柄について次のように述べられている。
頭脳明晰・真面目・几帳面・努力家・円満な人格者・国家の中心的人物・財政の巨人得難き予算通、懇切に後輩を指導、非難の声を聞いたことがない。決して命令的でなく相談的であった。
日銀の玄関番にも脱帽して敬礼して通った総裁等々の指摘があり、日本の政界・財界における活躍・貢献度は絶大であった。

この地元西那須野においては、父通庸の意志を継いで農場の経営や塩原別邸の宮内庁買い上げ等について種々配慮されている。狩野小学校へは備品寄付（明治 40 年）、建築費寄付（明治 43 年）、樹木寄付（大正 8 年）などが行われている。

弥太郎氏の数々の業績に対し、大正 8 年 3 月　正三位　勲一等旭日大授賞が授与され、3 月 7 日　脳溢血のため逝去された。







1 明治26年11月23日

（原文）大山捨松→

Viscount Mishima,

Dear sir,

In reply to your letter of yesterday, I have a few final words to say. I wish you clearly to understand that we took this step in this matter because the desire to sever the tie so clearly shown by your family — a desire which the honorable men of old Japan, still more those of the new would look upon with abhorrence, left us no other alternative.

I sincerely hope that you realize that, though in actuality we seem to have taken the initiative step and offered to take back our daughter; which step our honor demanded, in reality the whole responsibility of breaking off the connection rests on you and your family. I regret very much that Japan is barbarous enough to allow a man to divorce his wife on account of her illness.

But I am glad to know that even in Japan there are not many men who have had a foreign education and yet who have lost all sense of right and wrong, as to act obediently in the dictate of a lot of ignorant women. I send back unopened two of your letters to our daughter which Count Oyama kept back from her, and also one from her to you before the true state of the case was revealed to her.

I shall keep a copy of my letter to you, and I trust you will do the same as a memento of this affair.

Yours Truly

Stematz Oyama

Nov 23rd 1893

「封筒表」 Viscount Mishima

〔別紙〕和訳

（　）年（　）月（　）日

三嶋子爵閣下に呈す

昨日送呈されたる貴君の書状に対し妾は只最期の数言を呈せんとす。妾は我等が此度の事に及びしは貴君の家族に於て新日本の男子は固り、古来日本の義士と雖ども嫌悪する所の所望を顕はし他に方法なかりしに因れり。妾は表面上我等の方より名誉上拠なく申出しと雖ども、離縁之責任は全く尊君と尊君の家族に在る事を明知せられん事を望む。

妾は日本が未だ野蛮にして男子をして病気の故を以て其妻を去らしむるが如き事有るを悔ゆ。然れども妾は日本と雖ども尚外国の教育を受けて道理と不道理を弁別するの明を失し数個の愚婦の命令に従ふ如き者の少なきを悦ぶ。

茲に此度の事か娘に知れざる以前貴君より妾が娘に送られたる二通の書状と娘より尊君に宛たる書状にして大山伯爵が手元に止め置きたる者を送付す。

妾は此事の記念として妾より尊君に宛たる此書状の写しを保存すべく尊君の又之を保存せん事を望む。

大山捨松宛弥太郎書簡

拝啓　其後は久敷御無音申上候御高免なし被下度

先達てより是非参上候て種々御話し申上んと心のみはあせり居り候次第に御座候へども何分医薬の効見えず今以て臥床いたし居り候次第に御座候

承玉はれば信子は一昨日横須賀之方へ参り候よし同所は時候も暖なる上伊地知叔母様鮫島奥様等も御出相なり候へば信子の為には淋しくも無之此上なき事と存じ申候

信子の身上二付御先日離縁之相談起り候依頼私心中之恋嘆は何にたとへん方無之只夢現の如く消日いたし居候兄弟有り親有りて一家を引き受居り候身は自分の意見通りには参らず候故悉敷私之所存を陳べ候後一切之事を親戚に委任いたし申候私之悲しみは申迄も無之候へども信子の心中に立入り考候時は実に一しほ悲哀にせまり無限之感情を催し候実に女々しき申分には候へども如何なる前世之悪因にてかかる事になり行き候にやと考居り申候私之心中御推量なし被下度候

早々　不悉

十一月廿二日

弥太郎拝

大山叔母上様　御許へ

叔父上様其他皆々様へよろしく御伝言被下

※（牧野家に保管（通庸二女峰子は牧野伸顕夫人））